

文壇私記 進藤純孝



進
孝
進
孝

文
記
文
記

文壇私記

一九七七年一月一五日印刷
一九七七年一月三〇日発行

定価 八八〇円

著者 進藤純孝

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇
電話 出版部(〇三)二三〇—六三六一
販売部(〇三)二三〇—六一七一

印刷所

大文堂印刷株式会社
錦印刷株式会社



©1977 0095—77216—3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えます。

	目	
	次	

新	文	第	才	作	贗	茫
進	壇	三	セ	家	の	茫
評	の	の	ッ	は	季	二
論	崩	新	力	一	節	十
家	壊	人	イ	人		年

			屋	一		
				人		

92

78

64

49

35

21

7

	座	本	幻	風	退	沈
	談	当	の	向	転	没
	会	の	雑	き		シ
		と	誌			カ
	濃	こ	構			カ
	密	ろ	想			ッ
	な					テ
	季					ル
	節					
	181	166	152	137	122	107

ブックデザイン ● 田名網敬一

	文	
	壇	
	私	
	記	

范范二十年

——このたび、日野啓三氏が芥川賞を受賞されましたが、これを機会に氏を囲んで二十年振りに一二会の方々にお集り願ひ、左記により一夕を過したいと存じます。ご多用中のところ恐縮ですが、何卒お繰合わせの上、ご出席下さいますようご案内申しあげます。

という速達便の届いたのが、昭和五十年の二月十四日のこと。差出人は「文藝春秋」の鈴木貢、樫原雅春、大塚興の連名である。

二十八日金曜日の午後五時から七時まで「クラブ数寄屋橋」で、「二十年振りに一二会」をやろうという誘ひ。すぐ出席の返事を出したのは、別にその会がなつかしかったからでもない。それより、誰が顔を出し、誰が姿を見せないか、こっちの勘が当るかどうかに、ちょっとした興味があつた。

「クラブ数寄屋橋」というのは、行ったこともないし、一二会とどんな縁があるのか見当もつかなかったが、多分「文藝春秋」のひいきで、吉行淳之介なぞの行きつけのバーだろうかと呑み込んだ。

「午後五時から」というのはいいとして、「七時まで」と限ってあるのは、どうしたわけか。「日野啓三氏が芥川賞を受賞されましたが、これを機会に氏を囲んで」とあるから、あるいは、あまり酒を飲まぬ日野の注文かも知れぬ。

そういえば、「二二会」の頃、日野は二次会にはほとんど付き合ったことはない。たいてい作家は作家で、批評家は批評家といった流れ方をしたもののだが、そのいずれも見捨て、冷笑を残しながら新聞社（読売）に戻って行く日野の、少年のようなうしろ姿が目に見えかぶ。あの頃、日野は、昭和四年生まれだから、二十四歳だったことになる。

そんな話をしたら、「冷笑を残して」どころか、「まるで、おじさんたちの集まりの中にいるようで」、やれやれとばかりに逃げ出していたのだと苦笑する。さあ、それはどうか。ともかくも、一番若かった日野啓三も、四十六歳。

茫茫二十年、歲月は流れたのだ。

その日、二月二十八日は、かなり寒かったように思うし、記憶に間違いがなければ、雨が降っていた。渡されていた略図を頼りに、行き過ぎたり、戻り過ぎたりし、やっと見つけた「クラブ数寄屋橋」に、おそろおそろ首だけ突っ込む恰好で一足入ると、「いらっしやいませ」と待ち兼ねたような迎え方。

こういうところでの、そんな扱いには不慣れのこっちは、恐縮しながら傘や外套を渡しかけると、「いようっ」と妙な声がかかり拍手である。女の子が「まあっ」と、馴染み客にでもするように腕をとって席に導いてくれる。いやになつかしそうな素振りにまごつき、その昔、銀座、新宿と飲ん

で歩いた頃の「もしかしたら？」と、何度も見直してみるのだが、覚えはない。

そうだろう、いくつぐらいかよくわからないが、二十年前は、生まれてなかったか、まだおむつだったに違いないような娘たち。勘定すればそうなのだが、あまり親しげに語りかけてくるものだから、つい歳月など忘れて、「あの頃、どこに居た子か？」と眺めてみたりする。

拍手に照れて、逃げ込むように坐り込んだ席から、やっと息をついて見渡してみると、安岡章太郎がいる、庄野潤三がいる、近藤啓太郎がいる、音頭をとった鈴木、樫原、大塚の三人もいる。そのうち、三浦朱門が来る、奥野健男が来る。誰も拍手と「いようっ」の奇声に面くらい、近い席を見つけてもぐり込むが、さすが吉行淳之介は、

「おいおい、冗談はよせ」

と、笑いで受けとめながら、

「拍手せにゃならん主はまだかな」

その主、『あの夕陽』で、三度目の正直、見事、昭和四十九年度下半期（第七十二回）の芥川賞を獲得の日野啓三も、やがて現われ、今度こそほんとの拍手。前後して、五味康祐も例の着流し蓬髪で駆け込んで来、どうやらこれで勢揃い。幹事役の樫原が挨拶に立ち、先ず欠席者とその理由の紹介。鹿児島島の島尾敏雄の欠席は想像できたが、あとはこっちの勘だめし。

理由のいちいちを忘れたが、案の定、小島信夫は来なかった。結城信一は出席と踏んでいたが、ぎっくり腰で不参。どちらか踏み兼ねていた武田繁太郎は欠席。浜田新一（日高晋）は、早くから文芸を遠ざかり、経済学博士とかで学者になってしまった秀才だから、旅行でなくとも出席しな

ったろう。村松剛は、来そうにも思えたが、海外旅行で出られなかったのは、文芸評論とは縁遠い仕事に傾倒の今、かえって自然な氣もした。

欠席こそ六人に及んだが、檉原の話では、「こういうグループで、二十年間、一人も欠けなかったというのは、珍しい」らしく、日野の受賞もさることながら、この「珍しい」長持ちも、まことにめでたく、今夕はそのお祝いでもあったとか。

訊けば、静香さんとかいうこのマダムが、「一二会」とは何の関係もないながら、出席の顔ぶれで知らないのは床野潤三とこっちだけ。そんな事情なら応援しましょうと、場所だけでなく、酒の持ち込みも結構、女の子も動員と、好意の限りをつくしてくれたものらしい。

が、わずか二時間ほどの顔合せ。時間も時間だったから、そう弾む席にはならなかった。「二十年振り」では、どう趣向をこらしても、弾みようはなかったかも知れない。いや、弾んだらおかしい。二十年の歳月が、それほど抵抗なく集まっていたこのグループを分けていったか。

それが、けっして散りぢりばらばらにならず、こうして集まってみたりする。ゆるいながらも関係を保っているところに、このグループの妙な特徴があるのに違いない。もう少し、宴の席が長かったら、その妙な特徴のいくつかのしるしものぞけたろうが、こっちが女の子たちに訊かれて二十年の昔を語ったり、席の近い庄野や奥野に言葉をかけたりしているうちに、時間切れ。

それに、吉行と近藤が中座したことも、宴をしぼませる因になったか。たしか、日野啓三が「氏を囲んで」の催しに謝辞を述べ、二十年を振り返って若干の感想を述べたあと、

「みなさん、ちょっと演説させてください」

と吉行が立ち上った。

『あの夕陽』の受賞には、吉行と安岡とが芥川賞の選考委員であることがさいわいしたかどうか。そこところはよくわからないが、両委員が二十年前の仲間の一人に授賞するめぐりあわせになったについては、いささかの感慨もあるに違いない。

講演はむろんのこと、スピーチの類も好まない吉行が、「演説させてください」は奇妙だったが、それでもとっさには、そうした感慨の一端でも述べるつもりかと、耳傾ける構えになった。

が、「演説させてください」は道化。なんでも近藤啓太郎の『微笑』が高峰秀子の主演でテレビにのるらしく、その宣伝も兼ねた対談に出演するとかで、「中座させてほしい」というおわびだった。

無礼になるほどの会でもなければ、それで急に座がしらけるものでもなかったが、そんなことがきっかけで、誰もが坐り心地に飽きを感じてきたようだった。「それじゃ、このあたりで」の檜原のあいさつで別れ、同じ電鉄で帰れる庄野と連れ立つ。

こういう時、さっと座を立て、すたすた帰るのが常だった日野から「まっすぐ帰るのか」と声をかけられたのも、妙な気がしたが、受賞の祝いも兼ねた集まりであってみれば、その彼が常になく機嫌のよさを示しても不思議はなかった。

こっちは二次会に流れる気分にもなれず、庄野と地下鉄の入口に向かったが、「やあ、しばらく」とあとを追ってきた三浦朱門が、そのままは融け込まず、「あっ、間違えた。おれはあっちだ」と、ぎこちなく引返していったのは、何を感じてのことだったか。

奥野健男が五味康祐を語り「二十年振りに一二会」のことに触れた文章によると、「その晩は五味さんと一緒に、日野、吉行、近藤氏らと連れだち何軒かの酒場を梯子した」とある。いつも「お先に失礼」だった三浦は肯けるとして、安岡などは何処へ行ったのだろう。あるいは、「文春」の三人と一緒にあったか。独り何処かへ流れたか。

おそらく、島尾や小島、結城、武田あたりが来ていても、この日の流れは、一同揃ってとはゆかなかったろうし、またそうはならないところに、茫茫二十年の影の髪鬢がうかがえる。

あれは、昭和二十八年の二月だか三月だかの十二日のことだ。吉行淳之介の筆によると、

——二十八年の早春の某夜、東銀座の「はせ川」で第一回の会合がおこなわれた。そのときの顔ぶれの正確な名は次のとおりである。島尾敏雄、小島信夫、五味康祐、結城信一、近藤啓太郎、安岡章太郎、武田繁太郎、三浦朱門、庄野潤三、進藤純孝、日野啓三、奥野健男、村松剛、浜田新一、それに私の計十五名。村松も浜田も、私と同じ「世代」の同人だったが、評論家側の人選については、私は何も知らない。

会の名は、その席上で「一二会（いちにかい）」とつけられた。

とある。同じことが、小島信夫の筆では、

——一通の手紙が舞いこんできた。タイプで印刷したもので、私は昂奮して読んだ。そこにはこんなようなことが書いてあった。

私達はこれから親睦の意味で月に一度位会いたいと思う。これはそれ以外に他意のない会なので、どうか気を楽にしてお出席下さい。というわけで、発起人は、三浦、武田（繁）、安岡、吉

行(?)で、出席希望者として、島尾、庄野、五味、近藤(啓)、結城、などがいた。評論家には、村松、日野、奥野、服部、佐古。

封筒は「文学界」のもので、発起人は、「文学界」のすすめで、人選して集合をかけたらしいことが、文面で分った。となつてゐる。

さて、その「一通の手紙」は、「二十年振りで二二会」の時、櫻原が持参したが、うかつにも眺めただけで、文面まではたしかめなかった。

こっちも「昂奮して読んだ」方だから、このタイプ印刷の、封筒は文藝春秋の手紙は、とつてある筈だが、探し出してくる根気はない。が、少くとも「顔ぶれの正確な名」は、吉行の指摘通りで、服部や佐古の名はなかったと思うし、その後彼らの出席した記憶もない。

なんでも、その年(昭和二十八年)のはじめ、安岡章太郎、三浦朱門、武田繁太郎の三人が、市ヶ谷にあった吉行淳之介の六畳一間の部屋を訪れ、「文学界」編集部の肝煎りで新人の作家評論家の会合を開く話を持ち込んだらしい。

例によつて病臥していた吉行は、人選をまかされたとかいう三人の気の重さを察し、相談にのり、そこは六年ほども編集記者の経験のある吉行のこと、この「しんどい」人選を手際よくリードしたようだ。その経緯が、次のように述べられている。

——芥川賞作家になつたばかりの五味康祐と、島尾敏雄の名は入れてほしいというのが編集部の意向だ、と彼らが言う。島尾の名は、私にとっては新進あるいは既成のものとしてしか受け取れ

なかったが、彼が集まりに加わってくれることに異存があるわけではない。ただ、新進あるいは既成の感じを与えるほかの名前（たとえば阿川弘之、真鍋呉夫）などは、除外するのが妥当とおもった。

つづいて私たちは私たちの希望する十人の名を紙片の左側に書き、残りの名を右側に書いた。この際も、できるだけ作品についてだけの価値判断にとどめるように努力した。たとえば小島信夫とは、だれも面識がなかった。

こうして差し出された作家十名の人選は、ほとんどそのまま、「文学界」編集部を受け容れられ、批評家五名は編集部の人選で付け加えられたらしい。ただ、編集部は肝煎りの役といっても実質は主催者に近く、発起人たちはその点にこだわり、「会費各人持ち寄り」としたが、それは容れられなかったという。

「会合の当日は、全員出席であった。商業雑誌に自分の作品を活字にしたいとおもっている青年ならば、こういう呼びかけにソッポを向くことはできないものだ」と、吉行は書いているが、誘いの手紙を「昂奮して読んだ」という小島の気持も同じだろう。

しかし、それでも、どうしてまた、縁もゆかりもほとんどないような、これだけの作家や批評家が、「全員出席」したりしたのだろうか。いくら「文学界」という商業雑誌の肝煎りでも、ただ「自分の作品を活字にしたい」だけのことで、どんな奴が来るとも分らぬ会に出かけるだろうか。

「私はその出席者の名前を何度も見た」と小島は書いている。おそらく、人選に当った発起人以外は、誰もそうしたのに違いない。そして、そこに何ものかを感じとり、出かけてみる気になったの